

## 大東の書道に期待するもの

今 井 潤 一（凌雪）

### □書の発見と「九成宮禮泉銘」

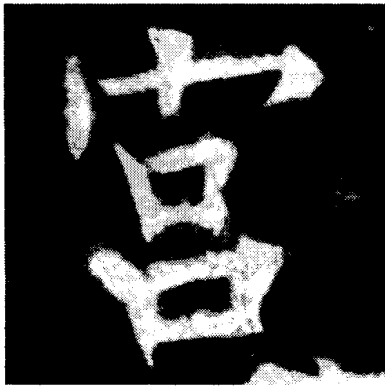
只今、ご紹介いただきました、今井凌雪です。

今日はこちらへ来て、お話をするというところに、非常に感慨深いものがあります。僕は小さい頃から、何が好きだったかというのを考えるのですが、一番好きだったのは飛行機です。

書はそんなに好きだったかどうか分からないのですが、お習字をしていて、そこである一つの発見をしました。それが発端になり、書道というものは優れたものだと感じたことがあります。

みなさんは、あの「九成宮禮泉銘」をご存知だと思いますが、九成宮には「宮」という字がだいぶあります。九成宮の本を持って参り、見本を選ぼうと思いましたが、たくさんありますし、みなさんがご存知だと思いますので、このままお話しします。

九成宮の「宮」という字は、横画が、ひい、ふう、みい、よう、いつと五本あります。僕が習ったお習字では、「横画が五本ありますが、そろえましょう」と習いました。ところが、原物の九成宮を見ますと、ウ冠の横画と上の「口」の横画の間が一番広い。二つの「口」と「口」の間が一番狭い。初めは間隔がみな同じだと思っていましたし、なぜかと考えたわけじゃないのですが、非常に良い字だなと思っていました。



「九成宮禮泉銘」

ところがよく見ますと、ウ冠の点ですが、点の下部が横画の下へ出ています。ウ冠と「口」に周りが囲まれているのです。それでウ冠の下が一番広い。「口」と「口」の間は、外へ開放されているから狭い。「口」という字は、九成宮はみな「背勢」といって、全体にX型に引き締まっている感じですが、二つの「口」の外側は、下をすばめて引き締まっています。「背勢」ですが、「口」の中の余白を見ますと、内側がみな「矩形」になっています。すなわち四隅がみな直角です。このことは、先生に習ったのか、それとも自分で発見したのか分かりません。あるいはヒントを頂いてそう考えるようになったと思いますが、これは事実です。これはたいしたものだ

と思いましたが。だから僕は、古典を勉強し始めたのはそれからだったと思います。これは本当に合理的です。九成宮にはこういう例がいくらでもあります。非常に僕としては発見でした。それで九成宮を一生懸命勉強しました。この字は一番好きです。今でも好きです。九成宮が一番良いお手本で、書いてみるとすごく難しい。今はわりあい楽に臨書が出来ますが、以前はとても練習できなかった。そういう経験があります。だから書道に一生懸命になったのは、この「九成宮禮泉銘」のためであったと思います。この字は、僕が熱中したというとおかしいですが、勉強するようになった発端です。

#### □中学校と中谷釜雙先生

僕の中学校では、お習字は二年まででした。小学校でもお習字をやりましたが、中学に行って、そこでお習字を二年生までやりました。それで、なぜ勉強したいと思ったかを考えますと、この頃じゃなかったかと思えます。これはいいかげんなものじゃないと本当に感じたわけです。それがおそらく書というものに興味をもった最初であったと思います。

そんなことで、最初のお習字は、書道の先生のお弟子さんが小学校の先生で、その方に熱心に教えていただいて、興味をもったことは事実です。

中学校（旧制郡山中学・現郡山高校）に行った時、中谷釜雙（本名・勝一）先生に習いました。釜雙は雅号です。この先生は辻本史邑先生のお弟子さんで、史山・史峰という雅号を取っていました。史邑先生の名前もあって史山・史峰を雅号にしていますが、途中から難しい釜雙（ふそう）という名前に変えたのです。なぜ変えたかと言いますと、「カマスゴ」から来たそうです。カマスゴをご存知ですか。細い魚で、塩をかけて食べるというドジョウみたいな魚です。当時、国語の先生で体格の細い先生がおりました、その先生のおだながカマスゴと言ったものですから、それをご自分の雅号にされました。この方に数年習いました。

#### □中国への夢

そういうことで、書に興味をもっていました。今日の方々に一番関係あると思いますが、書道の学校に行きたいと思えました。中学生になった時にです。ところが書道を教えてくれる場所がないのです。大東文化大学もありました。この大学には書道の先生がいらっしゃったと思いますが、書道専門の大学はないのです。これはしょうがないと思ひ、いろいろ考えました。書道は中国から来たのだから、中国へいったら勉強できるのではないかと。ただし、僕の小学校から中学校の時代は、日本から満州へ多くの人が行っていました。僕のおじいさんにあたる方やおじさんが、満州へ行っていたわけですから、満州へ行けば勉強で

きるのではないかと考えました。中学校の時は、あまり勉強せず、何もする気がなかったのですが、その頃から勉強したいと思うようになりました。

ところが中国へ行ったら、言葉ができないといけない。それじゃもう駄目だと。やっぱり言葉ができないと、書道も勉強できないと考えました。非常に簡単なことですが、奈良の近くに天理教の天理外国語学校（現天理大学）があり、そこはなかなか外国語で有名な学校でしたし、またわりあい誰でも入れるような学校でもありましたから、そこへ入ったわけです。それは非常に僕にとっては良かったのです。

#### □天理外国語学校

先生方に非常に立派な方がいらっしゃいました。梅鈞先生、それからその息子さん（梅奉生）がいらっしゃいました。老梅先生と小梅さんです。当時、息子さんは京都大学の医学部生でした。この方は学生でしたが、学校にも教えに来ていました。老梅先生は、書がすごく上手なのです。その当時のことで、たいしたことはないのですが、とにかく黒板に書くのがサツとものすごく速いのです。見てみると、どうも蘇東坡を真似したのではないかと。蘇東坡風の書をサツと書いてしまうのです。先生は、「書は速く書かないと駄目だ」と言いました。「遊びに來い」とおっしゃるのでよく行きました。学校のすぐそばにいらっしゃるのですから。そうしたら、僕らが使うような悪い毛辺紙を持っていらして、手習いなさいというのです。書くのが実に速い。サツとお書きになる。それがちゃんと蘇東坡風の字をお書きになる。だからいつもそこに参りました。息子さんにも授業を習いました。僕も学校に行ったら中国に行けるのじゃないかと思って、中国語の勉強をしました。中学校の時は勉強したことがないのですが、これから行くだろうという気持ちがあり、一生懸命勉強しました。

#### □会話のテキスト「急就篇」

今の外国語学校はどうか分かりませんが、一番今と違うのは、録音機がないことです。だから、昔は言葉でも何でも暗記するよりしよがななかった。とにかく暗記ですから、いろんな本を読みました。こういう本がありました。『急就篇』というちゃちなマメ本です。今も持っている人がいるかも知れませんが、小さな本です。おそらく当時、中国へ日本の軍人が盛んに行っていましたから、その人たちが速成に勉強するための本だったと思います。ちょうど大きさはこのぐらいの（手の中に収まる）大きさです。会話がずらっと並んでいます。最初の教科書ではなかったのですが、主にこれが勉強になりました。これは宮島詠士先生が作った会話の本です。それだけではありませんが、主にこの本を暗記してしまえば、中国語で話ができる本です。

初めは「你好」とかありますが、最後は「桃太郎」の話が載っていました。その題は「鬼退治」で、中国語で書いてありました。僕は失ってしまいました。これは良い本です。僕は桃太郎の鬼退治の話まで全部暗記しています。語学は全部暗記しないと役に立たないということで、本を全部暗記するよう義務づけられました。全部ざっと言えるようにと。初めての語学は、やっぱり暗記してしまわないと役に立ちません。

先日でしたか、学校が非常に懐かしかったものから、天理の病院に行った帰りに、教室へ行ってきました。建物はそのまま残っています。三階建ての校舎があり、私の居た教室もそのままあります。もう何十年になるでしょうか、天理の有名な図書館があり、その横に建っています。その三階建ての外国語学校の校舎で、中国語の勉強をしました。そこで僕は、そんなことを思いながら見てみたわけです。

僕の学校時代はちょうど戦争時期にあたります。昭和十七、八年で、軍隊へ入らないといけないようになりました。だから、二年生か三年生の一学期だけで終わりで、そのまま戦争へ行ってしまうました。学校ではその頃、よく弁論大会があり、やっぱりやらなければいけないのです。僕は中国語でしたから、中国語で何かやらないといけない。新聞の記事か何かを持ってきて、それを丸暗記して、始めからダァーとしゃべるのです。どうしてそれを知ったか分かりませんが、誰かにそういうことを盛んに鍛えられたと思っています。その当時のことを振りかえりますと、まだ録音機がありませんでした。その後、中国語を勉強するのは非常に便利になったと思います。しかし当時はやたらと熱心にやっていましたから、こういう本も全部暗記しておりました。そうしてだいぶしゃべれるようになったのです。

#### □東京教育大学と初の奨学金留学生

軍隊から帰ってきて後、何年かしてから、東京教育大学で書道を教えてくださいという西川寧先生のお話で行くことになりました。上條信山先生が私の先代の教授でした。その後では行ったのですが、学部的一年生から大学院生までみな一緒に居ました。全部で（この会場の）半分くらいでした。何人に教えたかは分かりません。本でも読まないでしょうがないということでもやりました。僕は中国語をやっていたものですから、中国語を勉強しようということでもやらせまして、今は中国へ留学するような人が出てきました。

初めての留学生として行った人が今、筑波大学に残っております。彼が行った時は、初めて中国政府の奨学金をもらって行きました。試験に受かりまして、現地へ行ったわけです。初めての書道と言いますか、留学生が奨学金で行ったのは初めてです。中央美術学院という学校で、そこに書道の先生がいらっしゃるのです、そこへ留学したのです。どうしたか分からないのですか

ら、心配になり北京へ参りました。

その時の先生が、啓功先生とって北京師範大学の先生で、書道でも有名な方です。その方が、中村伸夫君（現筑波大学助教）のために来たわけです。学校も師範大学と美術大学はだいぶありますが、その頃は日本人の小学校がそのまま美術学校になっていました。そこに彼一人の授業のために、わざわざ啓功先生が授業に出てきてくれました。ちょうど僕が行った時に、啓功先生が来られ、顔を合わせました。ところが先生が何を言ったか分からず、なかなか話しが通じないのです。いまだにはっきり覚えていますが、日本の中村不折先生は有名な方で、その話になりました。中国語で「Zhongcun Buzhe（中村不折）」と言うのが聞き取れなかったのです。何を言っているのかと思ったら、中村不折さんということが分かって、それから話しが進みました。

啓功先生は、中村君のために書道史の講義をされました。それをまた担任の薄松年先生が、学生が一人だったために、全部書き下ろしてくれたのです。薄松年先生は「年画」といって、中国で旧正月になりますと、バナーと貼り出すような版画がありますが、その専門家です。録音はあったのですが、書き起こせないものですから、薄松年先生が全部ノートに書いてくれました。とてもありがたかったです。それを見たら分かるのですが、なかなか録音をもらっても分からないことが随分ありました。こういうことを何回かやっている間に、我々も勉強することができました。当時の東京教育大学の学生たちは非常に勉強になりました。録音を聞いて文章を書き起こし、聞き取りなどを勉強できたわけです。これは非常に良かったと思います。

それから、中国へ書道の勉強のために留学をするような学生がいくらかずつ出てくるようになったわけです。最近はわりあいたくさん行っています。果たしてどれだけできるようになったか分かりませんが、そういう体制ができてきたというのはありがたいことです。今考えてみると、薄松年先生も中村不折さんも、初めて北京で啓功先生と話したわけです。私は中国語を二年とちょっと学んだだけで、後は戦争に行ったので、あまり勉強していない方ですが、そういうことができるようになりました。

#### □筑波大学での先生方との出会い

僕はそんなことを経験いたしまして、教育大に居たのですが、それが筑波大になりました。その時は、大学ができて早々の時でしたから、人事委員会ばかりやまして、新しい先生に来ていただく仕事ばかりやっていたものですから、書の勉強といひますか、指導はほとんどできなかったのです。

教育大と筑波大を合わせて十五年あまり在職しました。これは僕にとって、非常に貴重な経験でした。というのは、教育大にも筑波大にも非常に立派な先生がいらっしゃいまして、その方々といつもお会いし、また人事のことをどんどんやったものです。

から、いろんな方とお会いできました。その時、僕は非常に学校にいて良かったと思いました。学校は大変でした。大変でしたが、自分としては、いろんなところへ行きますから、先生方がどんな研究をされているのかが、みな分かりました。学生も、先生方はどんなことをやっているのかと思うと思います。大学の先生というのは、教えるだけじゃなく、自分が研究してないと先生ができないわけです。そうでないと教授になれません。ですから先生方は一生懸命勉強されています。筑波へ行ってからは、書道の指導はあまりできなかったと思いますが、個人的に言いますと、そういう先生方の研究の様というのを随分体験して、やはりこういうふうにはやらなければいけないと感心しました。

筑波大の医学部棟に、犬がいっぱい居ました。何でそんなに居るのか分かりませんでした。けれども、実験用であるとは知ってびっくりしました。それから、大きな塔があって、上から光線が降りてくるようですが、ガンの研究と治療にも使っていたそうです。

そういう中に中井先生という副学長のお医者さんがいらっしゃいました。その方はもう定年になられました。滋賀県の人です。僕に、「わしゃ、これや」と言って、少佐の襟章を見せてくれました。「私は昔、軍医の少佐だ」と言っておられました。その方に、「滋賀県の方が、何で浜松に居るんですか」と聞きましたら、そこには亡くなった人の「献体」という堀があり、僕は行ったことはないのですが、亡くなった人の献体死体が入れているそうです。解剖の材料に使ってくださいということで、献体するそうです。先生は、「私が死んだら入れてもらう」なんて言っていました。それで浜松にいらっしゃるので、先生は軍医さんで、そういうことをやってきて、必要があればそれを取り上げて解剖するのです。僕は、その方は今もお元気でいらっしゃるのです、非常に尊敬しています。とても立派な方です。いつまでもお元気でいて欲しいと思いますが、このようなことは、私が筑波へ行ったおかげです。いろんな方にいろんなことを教わりました。いろんな学部のことも分かりましたし、人柄がみな分かりました。僕は書道の授業はほとんどできませんでしたが、そういう経験をして、よい勉強をいたしました。

#### □王学仲先生との交友

筑波在職中に、王学仲さんという天津大学の書道の先生に来ていただきました。この方は、北京の美術学校（現中央美術学院）最初の卒業生です。もちろん絵画も有名な方です。王先生は、お家が昔の科挙の試験を受けるような家柄で、小さい頃から勉強していたようです。だから、詩などもすぐ作ってしまうのです。王先生が日本へ来たいということで、僕らも来てくださいますと言いましたが、中国は出さない。来てもらわないと困ってしまうので、僕は中国に行きまして、大使館から言ってもらいました。それで、やっと来ました。その先生は、僕らにすれば非常に勉強ができるものですから、二年間居られた時は、先

生のところに一緒に泊まり込みました。今、筑波に居ます中村君が、ちょうど留学から帰って来まして、彼がまたその家に居るといふことで、一週間に三、四日は居りましたでしょうか。そこに一緒に住んでいました。その先生は、朝ご飯でも何でも作ってくれて、僕は寝ているわけです。朝起きると、ちゃんと御馳走ができていて、それを食べると。そういう生活をしていました。だから、中国語は随分覚ええました。そういう生活ができたというのは大変ありがたいことです。

王先生は漢文もすぐに作ってしまふのです。筑波大学ができた時に、創立を記念した文章を作ってくれた先生は誰もいないのですが、その先生は三日くらいで、「筑波大学記」を作っていました。この先生は、昔の科挙の勉強をした人で、歳は僕より一つ下の人ですから、そんなに歳をとっている人じゃないですが、やっぱり向こうの人たちは何でも知っています。王先生は『辞海』という本を持っていて、これを持っておれば何でもできる、漢詩でも作れるといふことで、本当に持っているのです。詩もすぐに作ってしまいました。

#### □これから留学する人へ

僕は筑波に行きまして、書の方は自分が好きなことですからやりました。自分の希望のように、中国に行つて勉強できなかったですが、おかげで中村君をはじめとして、留学して勉強する人がたくさん出てきました。ここにいる河内君もそうです。これは、学生のみなさんの熱意だと思います。行つて遊んでいる者はおりません。何にもしないで何の授業だか分からない者も、たくさんおられますが、やっぱり学位をもらうような人は本当に勉強しています。そういう人がたくさんおられます。そういう人は向こうで良い体験をして帰ってきていると思います。帰つて来ない人もいますし、何をやっているのか分かりませんが、おそらく向こうへ行って貴重な体験をしているのだと思います。僕の時代は、こういうことはできなかったのです。できないから、中国語の勉強をしたと思つて勉強しました。勉強したけれども、途中で戦争で行けなくなり、戦争では非常に大変な経験をしました。私の同期の人は、半分くらい死んでしまいました。飛行機に乗っていたものですから。しかしそれは非常に大事なことだつたと思います。

ただし、みなさんがこれから中国へ行って、どんな勉強をするのかは、ちょっと自信がありません。といふのは、最初に留学生が行つた頃は、中国に有名な先生方がたくさんいらっしゃいました。僕の知っているような先生が、美術学校の先生だったのです。だから、その先生についていけば、何か得るものがあったと思うのです。今は年代的に僕らより若い先生ばかりで、気に入らないですが、勉強しに一度行つたら、非常に貴重な体験になると思ふます。行くだけで遊んで帰ってくる人がいますが、やはり国からお金をもらつて本当に行きたい人（中国政府奨学金留学生）は、はじめから心構えが違います。いろんなことができ

ていると思います。そういうことで得るところがあると思います。書道と言いましても、今はどうなっているのか分からないところがあります。古い先生は分かりますが、新しい先生が書道をどう考えているのか分からない。そういう中で、これから書道を考えていくことは大事だと思います。

#### □大東の書道に期待するもの

僕は中国へ行って、書の勉強をしたいと考えました。なぜ中国へ勉強に行くのかと申しますと、先ほども言いましたように、書道を勉強する大学が無かったからです。私はずっと前から大東文化大学に書道があるということは知っていましたが、実際は無かったのです。今度初めてできたのです。本当に随分長い話です。今年から書道専攻の学科ができたのです。

以前、僕は青山杉雨先生から来て下さいと言われて、ここで四年間教えました。しかしその間、学生は一人もいませんでした。いると思っていたのですが、時々学生がやって来て、なぜやって来たのかと思ったら、それは日文科の学生が単位を取るためにやって来たのです。僕はこの学校で授業をしましたが、書道らしきことは何も教えないで、手習いをする臨書をしたり、添削をしたり、そんなことをやっていたわけです。

自分の頃には書道の学校が無かった。もし大東にちゃんと書道科があったら、おそらく勉強していけたと思うのです。でも書道科が無かった。その後、ここへ先生として書道科があると思つて来たたら、その学生がいなかった。今度は、書道の学生を取るということになりました。これは、書道を勉強する諸君にとっては、大変ないい機会だと思います。先生方も体制を整えてきたわけです。これからはしっかり勉強できると思います。

今までは、中国へ旅行することがなかなかできなかった。けれども、今は簡単に行けるようになったので、遊んでいる人もいるでしょうが、向こうでいろいろ勉強できる。しかし残念なのは、僕がよく知っているような、年配の研究の深い方が少なくなってきたことです。年寄りが亡くなって、僕らが知っている先生がおらなくなった。物足りないところもありますが、この大東文化大学からも、中国へ行って勉強する人が出て来ると思います。真面目にやれば確かに得ることが多いと思います。

みなさんも、機会があれば中国へ行って、向こうの人といろいろ会って、今の書道がどうなっているか見て来て下さい。もう書道がこんなになつてしまった、ということもあるかもしれないが、何しろ歴史があり、またものがありますからね。みなさんも、できたら中国へ一年でも二年でも留学して、若い時ですからそういう体験をしても非常にいいことだと思います。

僕は、行きたかったけれど行けなかったので、その思いを話して知っていただければ非常にありがたいと思います。頑張ってください。どうもありがとうございます。(拍手喝采)



〈講師紹介〉

今井凌雪先生略歴（大東文化大学との関係を中心に）（二〇〇〇年六月十日書道学科開設記念講演会用）

【受賞】日本芸術院賞・恩賜賞・勲三等瑞宝章・日展文部大臣賞ほか

【現職】日展常務理事・読売書法会常任総務・日本書芸院顧問・雪心会会長

筑波大学名誉教授・元大東文化大学教授

復旦大学兼職教授・中国美術学院客座教授・西泠印社名誉社員ほか

【略歴（学校関係を中心に）】

大正十一年 奈良に生まれる（蘇東坡同日生） 郡山中学卒業 中谷釜雙・辻本史邑先生に師事

天理外語（現天理大学外国語学部）卒業

戦後 駿々堂勤務・立命館大学卒業・雪心会創設

昭和四十六年 東京教育大学教育学部芸術学科書専攻教授

昭和四十九年 筑波大学芸術学系教授 芸術研究科長・評議員・研究審議会副会長等を歴任

昭和六十一年 同定年退官・名誉教授（十五年間勤務）

昭和六十二年 大東文化大学教育学科教授・大東文化大学書道文化センター所長

昭和六十三年 大東文化大学書道研究所発足 初代所長

平成三年 同退職（四年間勤務）

平成九年 学校法人大東文化学園が書道学科設置の是非を「有識者会議」に諮問。先生にこの委員を依頼。

【著書】

昭和四十年 みかさ堂「条幅の手引き（上）」

昭和四十六年 日本放送協会「書道漢字―初歩から創作まで」 二玄社「書道技法講座十三・書譜」

昭和五十三年 二玄社「書を志す人へⅠ・Ⅱ」

昭和五十八年 日本放送協会「書道に親しむ」

昭和六十年 講談社「中国書蹟大観 全七巻」監修 日本放送協会「書道に親しむ―行書・草書」

二玄社「書画鑑定のでびき」中村伸夫氏と共訳

平成四年

講談社「今井凌雪の書道入門」上中下

平成六年

講談社「臨書を生かす」上中下

【その他】

「雪心会報」第一号(昭和三十六年)～第二十三号

「雪心」(昭和三十五年創刊)・「新書鑑」(昭和五十年創刊)主幹

(文責：河内君平)